

現代の ことば

かわせ
川瀬
いっし
慈

染みなのか、絵なのか。はじまりも終りもない。ムルという名の物乞いの女性が、私のフィールドノートに打ちつけた点描画。エチオピア北部の都市ゴンダールでのフィールドワークの折に私が滞在する安宿には、路上で生活を行う子供や、物乞いから吟遊詩人までいろいろな輩が頻りに訪ねてくる。ムルもその中の一入だ。外見から察するに彼女

の年齢は40代後半くらいだろう。だが町の人たちは言う、彼女は年をとることを恐れない。までも少女のままなのだ。ムルはつま先立ちで歩き、あたかも浮遊するように路上を行ったり来たりする。私の宿の近くに来るといつも、高い声で私の名を呼ぶ。そのまま部屋に招き入れて、私と目を合わせることも、会話をすることもなく、椅子に腰か

ムルの蛇



け、俯いたまま、私のフィールドノートを手に取り、沢山の点を打ちはじめ。カッカッカッカッ：カッカッ：。延々と、延々と。点はながて線となり、蛇となり、うねり始めるかのようだ。

ムルが点を打ちはじめると、その音にあわせて私の幼少期の頃の記憶が呼び起こされる。川で遊ぶ幼い私は、右手の人さし指を毒蛇に噛まれ

た。指は完全に麻痺し、腕は紫色に変色し、唇近くはれ上がった。病院で血清を打った。なんどか一命はとりとめたものの、指の骨は毒にやられて一部溶け、右側に少し曲がってしまった。

成人し駆け出しの研究者として各国を歩き来するようになってからも、私は蛇に再会することになる。私が出会う、一緒に仕事をしたアーティストや学者たちが、蛇の夢を立て続けに見るといふ話がしばしばあった。イスタンブールの影絵師は、蛇が川を渡り、岸についたときに花が咲くという。モントリオールの踊り子は、踊っている彼女の脊

髓を蛇はいり頭上には降りついたときに果実が実るのだという。また私が長年調査を行っていたゴンダールでは、ザールと呼ばれる憑依儀礼がある。霊媒は多くが女性であるのだが、彼女たちが霊媒として活動をはじめるときつかけて、夜な夜な大蛇と交合する夢を見ることが多い。

カッカッカッカッ：カッカッ：カッカッカッカッ：カッカッ。記憶の中に行んでいる、しばらくして必ずホテルのオーナーの老人がやってきて、物乞いのムルを私の部屋からつまみだしてしまふ。点描画はつねに未完成のまま私のノートに残される。

ムルがゴンダールの路上で交通事故に遭い、亡くなったから随分と長い時間がたった。記憶の中のムル。仁王のようにカッと見開いた眼、それとは不釣り合いな優しい微笑みをたずさえた口元。フィールドノートを開けば、カッカッカッカッ：カッカッ：と音を立ててムルの蛇は上空高く舞い上がる。ストリートの雑踏、匂い、色を撒き散らしながら、とまろを巻き現前の風景に記憶に侵入してくる。蛇になっても、ムルは私のノートに打ち付けるのだらう。延々と、延々と。

（国立民族学博物館助教 映像人類学・アフリカ研究）